公明新聞　2025年7月11日付５面

フランスで近代小説の礎を築いた
女性作家たちの試み

大阪府立大学名誉教授
村田 京子

大革命後、フランスでは普通教育の普及や印刷術の発達によって、文学が一般大衆に身近になり、作家が筆一本で生活できるようになる。そこで登場したのが「近代小説の祖」と呼ばれるバルザックで、スタンダールやユゴーなど著名な作家の他に、少数ながら女性作家も現われた。彼女たちがどのような作品を生み出したのかを見ていきたい。

図版「ブルーストッキングたち」（オノレ・ドーミエ画）。絵の下には次のようなキャプションがついている。「母親は作品制作の火の中、子どもは浴槽の水の中！」

スタール夫人は、ルイ16世の財務総監ネッケルの娘で、ナポレオンと対立して、彼から国外追放された作家である。初対面のナポレオンに対して、スタール夫人が彼にとって最高の女性は誰かと尋ねると、「子どもをたくさん産む女性」と彼が答えたエピソードは有名であるが、ナポレオンは彼女のように女性が政治に口出しすることを嫌悪していた。

代表作『コリンヌ』では、ナポレオンのイタリア遠征期のイタリアを舞台にした小説にもかかわらず、彼には全く言及されていない。しかも、物語冒頭で古代の戦車に乗って登場する天才詩人コリンヌについて「彼女の勝利の戦車は、誰にも悲しみの涙を流させることはなかった」と語られ、殺戮に明け暮れる軍事的天才ナポレオンへの密かな批判が込められている。また、コリンヌは、民族色や各国民の感性を尊重する多文化主義を主張しているが、それは、自らイタリア王になったナポレオンのフランス語化政策と真っ向から対立していた。このように、スタール夫人は検閲を避けながらも、ナポレオンの覇権主義を問題視し、小説の中で彼の存在を抹消することで、ナポレオン批判を成し遂げていた。

作品を通して男性優位社会を批判

スタール夫人の次世代に当たるのがジョルジュ・サンドで、彼女を始めとする女性作家は「ブルーストッキング」と呼ばれ、中傷や揶揄の的になった。ドーミエのカリカチュアが示しているように、ものを書く女は、家事や育児を蔑ろにし、身なりにも構わない女とみなされた。それは、知的創造という男の特権を女が簒奪したと感じる男の側の反発であり、男装で有名なサンドはまさにその標的であった。

さらに代表作『アンディヤナ』では、暴力を振るう夫に対して女主人公は「私が奴隷で、あなたが主人なのはわかっています。この国の法律があなたを私の主人にしました。あなたは私の体を拘束して手を縛り、私の行動を制御することができます。[……]でも私の意志に関しては、あなたは何もできません」と反論している。それは、男性優位の結婚制度への異議申し立てに他ならなかった。

スタール夫人やサンドはフェミニズムの先駆けとみなされているが、他にも女性ジャーナリストの草分け、デルフィーヌ・ド・ジラルダンや、マルクスより先に労働組合の必要性を訴えた、労働者階級の作家フロラ・トリスタンなど、サンドと同世代の女性作家たちが活躍していた。彼女たちの社会批判は、ジェンダーギャップ指数世界118位の現在の日本にも通用するもので、その作品価値は色褪せていないと言えよう。

（むらた・きょうこ）

©公明新聞